

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

10

OCTOBER
2008

CONTENTS

水戸室内管弦楽団 第74回定期演奏会(1).....	1
ハーゲン弦楽四重奏団演奏会.....	2
ソフィー・イエーツ チェンバロ・リサイタル.....	3
茨城の名手・名歌手たち 第19回.....	4
SELF PORTRAIT	
東京芸術大学同声会茨城支部、豊田あい子.....	4~5
最近の公演から.....	5
インフォメーション.....	6



写真左：ハーゲン弦楽四重奏団

写真右：ソフィー・イエーツ

写真下：水戸室内管弦楽団(2007年6月:第68回定期演奏会)

水戸室内管弦楽団と豪華ゲストたちによる、バロックの饗宴。

● 11/8(土)、9(日) 水戸室内管弦楽団 第74回定期演奏会

小澤征爾音楽顧問の腰椎椎間板ヘルニアによる直前の出演キャンセルという緊急事態を乗り切り成功させた、第72回定期演奏会と第3回ヨーロッパ公演。3度目の共演となった準・メルクルの指揮のもと、R.シュトラウスの2曲とベートーヴェンの〈田園〉に新鮮な演奏を聴かせた第73回定期演奏会。今年前半の水戸室内管弦楽団(MCO)の活動は、激動に満ちた、しかし実り多いものでした。

劇的な局面を信頼の絆で乗り越えたMCOは、その絆を確かめ、楽しむかのように、「指揮者なし」による第74回定期演奏会を行います。「バロック音楽の愉しみ～ヴィヴァルディとバッハ～」と名づけられたプログラムです。

MCOにとって、バロック音楽のみのプログラムは、意外に多くありません。最近では、ヘルムート・ヴィンシャーマンが指揮したオール・バッハ・プログラムによる第70回定期演奏会(2007年11月)が記憶に新しいところですが、それ以前では第28回定期演奏会(1996年11月)が唯一です。このときは「指揮者なし」の演奏会で、J.S.バッハの〈ブランデンブルク協奏曲 第6番〉と〈三重協奏曲〉、ヴィヴァルディの〈四季〉という内容でした。「指揮者なし」で精妙なアンサンブルを聴かせるMCOの実力をお楽しみいただけるバロック・プログラム。これまで少なかったことが不思議なくらいですが、それだけに、「指揮者なし」では12年ぶりとなる今回のバロック・プログラム、ご期待いただきたいと思います。

ヴィヴァルディ(1678～1741)とJ.S.バッハ(1685～1750)というバロックの巨匠2人が並び立つ今回のプログラムは、第28回定期演奏会と相通ずるコン

セプトですが、内容はもちろん違います。先輩ヴィヴァルディからは、2曲の協奏曲と1曲の声楽曲。まず、〈フルート協奏曲集 作品10〉の6曲から〈第6番 長調 RV437〉。音楽史上最初に出版されたフルート協奏曲集である〈作品10〉の中では、〈海の嵐〉〈夜〉〈ごしきひわ〉の標題を持つ前半3曲が有名ですが、この〈第6番〉も、〈ごしきひわ〉の引用があったり、第2楽章の旋律が第3楽章の変奏主題に用いられたり、創意においていさかも劣りません。フルート独奏は、MCOメンバーの工藤重典。そして、〈ファゴット協奏曲 長調 RV489〉。ヴィヴァルディはファゴットという低音管楽器のために協奏曲を書いた最初の作曲家です。その数なんと37曲! いずれも、ファゴットから多彩で豊かな表情を引き出す佳曲ばかりです。ファゴット独奏は、MCOメンバーのダーグ・イェンセン。

声楽曲(スターバト・マーテル)のご紹介を後回しにして、バッハの2曲の協奏曲にふれましょう。まず〈チェンバロ協奏曲 第1番 二短調 BWV1052〉。ヴィヴァルディがなぜかほとんど手掛けなかった鍵盤協奏曲こそ、バッハが新たに開拓した分野でした。消失したヴァイオリン協奏曲から編曲されたこの作品、疾風怒濤の激しい性格ゆえ、次男C.P.E.バッハの作品と思われたことも。チェンバロ独奏は第70回定期演奏会でMCOと初共演したドイツの名手、クリスティーネ・ショルンスハイム。そして、多彩な楽器編成とあふれる創意によりバロック協奏曲の金字塔として輝く6曲の〈ブランデンブルク協奏曲〉から〈第3番 長調 BWV1048〉。各3パートずつにわかれたヴァイオリン、ヴィオラ、チェロがめくるめく掛け合いを演ずるこの曲、MCOの弦セクションの実力をお楽しみいただくに

はもってこいです。なおこの曲のみ、MCOの定期演奏会で過去演奏されています(第43回定期演奏会:2000年11月)。

演奏会の最後を飾るのは、ヴィヴァルディの宗教曲の名作、〈スターバト・マーテル 短調 RV621〉。「スターバト・マーテル」は、「悲しみに沈む聖母はたたずみ給う」の意味で、磔刑に処せられた息子イエスキリストを悲しむ聖母マリアに捧げられた、祈禱の詩です。歴史上、数多くの作曲家がこの詩に音楽をつけ、名曲を残していますが、ヴィヴァルディ作品はベルゴレージ、A.スカラルラッチィのものと同並ぶバロック期の傑作です。悲痛にして甘美、そして華麗な技巧も求められる独唱パートを歌うのは、現代フランスを代表する名歌手であり、MCOとは過去2度にわたって共演している(第30回定期演奏会:1997年6月、第52回定期演奏会:2002年11月) ナタリー・シュトゥツマン。深い感情表現と知的なコントロールとを両立させる彼女の歌唱が、MCOの弦合奏と一体となり、悲しみを救いへと昇華させてゆくことでしょう。

このバロック・プログラム、お気づきの通り、メンバーとゲストが独奏・独唱にと大活躍します。これら名手たち・名歌手については、次号のvivoでじっくりとご紹介させていただきます。シュトゥツマンへの特別インタビューも掲載予定、どうぞお楽しみに。

なお、この演奏会は、「第23回国民文化祭・いばらき2008」にも参加しています。関連企画である「子どものための音楽会」については、6ページのインフォメーション欄をご覧ください。 《矢澤》



写真：ハーゲン弦楽四重奏団

左から、ルーカス・ハーゲン(1st Vn)、ライナー・シュミット(2nd Vn)、
ヴェロニカ・ハーゲン(Va)、クレメンス・ハーゲン(Vc)

ハーゲンSQによるオール・ベートーヴェン！シリーズ最終回もお聴き逃しなく！

● 10/5(日) ベートーヴェンは生きている ～その3～ ハーゲン弦楽四重奏団演奏会

ハーゲンの登場

1980年に結成されたハーゲン弦楽四重奏団。水戸芸術館には97年10月に一度登場しており、モーツァルト：弦楽四重奏曲 第17番 変ロ長調 K.458〈狩〉、ウェーベルン：弦楽四重奏のための緩徐楽章、シューベルト：弦楽四重奏曲 第13番 イ短調 D.804〈ロザムンデ〉を演奏しました。水戸の聴衆に大きな感動と驚きを与えたこの若きクアルテットの名演奏は、今でも鮮やかに思い出されます(メンバーすべてが1960年代生まれですから、当時は4人とも30代だったのですね)。

さて、20世紀から今世紀にかけての弦楽四重奏団の歴史を振り返ってみますと、それこそ数多くの弦楽四重奏団が存在し、それぞれに個性的な演奏活動を繰り広げていたわけですが、中でも「その時代の顔」と呼ぶ一部の傑出した弦楽四重奏団が、時代の演奏様式をけん引してきたことも見て取れます。

戦前に活躍しSP録音でも多くの名演を残したブッシュ四重奏団、戦前から1960年代後半まで長い期間にわたって活躍し3度のベートーヴェン全集を残したブダベスト弦楽四重奏団、戦後46年に結成、完璧なアンサンブルで世界を驚かせ、現代作品にも多くの名演を聴かせたジュリアード弦楽四重奏団(第1ヴァイオリンのロバート・マンは97年に引退したが、その後ジョエル・スミルノフに代わり現在も活動中)、そしてウィーンの伝統の継承と現代作品との積極的なかわりを両立させ、規範的な演奏グループとして常に多くの聴衆の支持を集めたアルバン・ベルク弦楽四重奏団…。

96年5月には水戸芸術館にも登場し、名演を聴かせたアルバン・ベルク弦楽四重奏団。80年代には早くも世界トップの弦楽四重奏団としての評価を確立し、以来ずっと室内楽の世界をけん引してきたことは、皆様もご存じのとおりです。しかし、つい最近のことですが、今年の7月をもってアルバン・ベルクは解散してしまいました。

長きにわたりアルバン・ベルクが守っていた世界トップの座を受け継ぐ弦楽四重奏団——それは、ハーゲン弦楽四重奏団においてほかにないのではないのでしょうか。

「家族」そして「ザルツブルク」

長い時間を4人で過ごし、濃密な議論とリハーサ

ルを積み重ねて音楽を作っていくかばならない(曲も重くシリアスなものが多い)弦楽四重奏団は、音楽的にも人間的にも、メンバー相互の信頼関係(それは「絆」と言ってもいいでしょう)がとりわけ重要になります。アルバン・ベルクの絆の核は「ウィーン」。一方、ハーゲンの絆の核は「家族」そして「ザルツブルク」と言えそうです。

ハーゲン弦楽四重奏団は、ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団の首席ヴァイオリン奏者だったオスカ・ハーゲンの4人の子どもたち(第1ヴァイオリンからルーカス、アンゲリカ、ヴェロニカ、クレメンス)によって結成されました。長男のルーカスは、「私たちハーゲン家では皆、兄弟姉妹でしたし、同じ屋根の下で生活し、勉強し、練習していました。ですからそこでクアルテットをやる、室内楽をやるのはごく自然なことであり、クアルテットがある意味でもっとも身近な音楽活動であり、また喜びの原点であったことは言えると思います」と語っています。ともすれば構えて入りがちな弦楽四重奏というジャンルに、子どものころからごく自然に親しめたこと、そして血のつながった兄弟姉妹がそのまま大きくなってグループを結成し得たことは、ハーゲンの類まれなアンサンブルの基礎をなしていることでしょう。

その後、第2ヴァイオリンのアンゲリカがアネット・ビクに、次いで87年からはライナー・シュミットに交替します。しかし皆、ザルツブルク・モーツァルテウム・アカデミーに在籍し、ヘルムート・ツェットマイヤー教授のもとで学んだことは一致しています。モーツァルトの生地ザルツブルクで生まれ、その地に息づく音楽教育のもとで育った彼らには、共通の高度な音楽言語があり、それを使って驚くほど自由に、柔軟に音楽を作っていくことができるのです。

このように、弦楽四重奏団としてこの上なく強固な「絆」でメンバー同士が結ばれているハーゲン弦楽四重奏団。97年の水戸芸術館での演奏会から11年、メンバーは皆40代になり、妥協のない解釈と緊密なアンサンブルに一層磨きをかけたハーゲンの演奏は、今まさに世界のトップに立つ弦楽四重奏団であることを証明するものになるはずですよ。

オール・ベートーヴェン・プログラム

曲目はオール・ベートーヴェン、しかも中期と後期の弦楽四重奏曲3曲という重厚なプログラムが生まれ

ました。

まず、ベートーヴェン最後の弦楽四重奏曲となった〈第16番〉(1826年作曲)。第4楽章の対となる動機に「そうでなければならぬのか?」「そうでなければならぬのだ」と記されていることで有名です。後期に至っても、さまざまな楽章構成を大胆かつ周到に試みたベートーヴェンは(〈第13番〉は6楽章、〈第14番〉は7楽章、〈第15番〉は5楽章構成)、〈第16番〉では伝統的な4楽章構成に戻っています。しかし、死を1年後に控えたこの作曲家の創意とそれを具現化する熟達した作曲技法は、衰えることを知りません。

2曲目は、中期に属する〈第11番〉(1810年作曲)。この時期を代表する傑作〈第7番〉～〈第9番〉(〈ラズモフスキー四重奏曲〉と呼ばれる)で、「交響的」と言い得るほどに弦楽四重奏のスケールを拡大させたベートーヴェンは、この〈第11番〉の作曲にあたって、「厳粛な”(=Serioso)表情で立ち止まったかに見えます。しかし、外ではなく内に向き、拡大ではなく凝縮に傾斜したこの〈セリオーソ〉で、フーガ、変奏、「うた」といった要素の実験はさらに慎重に進められ、後期作品の萌芽を準備します。

3曲目は、長大な〈第14番〉(1826年作曲)。作曲した順番で言うと、〈第15番〉＝5楽章構成、〈第13番〉＝6楽章構成ときて、この〈第14番〉でついに7楽章構成という未踏の領域に至ります。ヴァーグナーが「音で表現できる最大の哀愁」と評した第1楽章から、長大な変奏曲に彼岸への憧れをのせた第4楽章、そして強固な意志の力で進行する第7楽章まで、ここで聴かれる音楽は、「弦楽四重奏曲」という枠を越えた一編の巨大な物語のようです。

さて、お気づきの方も多いたはと思いますが、この3曲は水戸室内管弦楽団が弦楽合奏版で取り上げたことがある曲です(〈第16番〉は92年の第12回定期演奏会[指揮者なし]、〈第11番〉は97年の第31回定期演奏会[指揮者なし]、〈第14番〉は2000年の第41回定期演奏会[指揮：小澤征爾])。最高の弦楽合奏版の演奏を思い出しながら、最高のオリジナルの弦楽四重奏を聴くというのも、また格別な味わいをもたらしてくれることでしょう。どうぞご期待ください。

《閑帳》



写真：ソフィー・イエーツ

来日公演唯一のソロ・リサイタルを水戸で！ フランスの「クラヴサン」音楽、そしてバッハ…。

● 10/18(土)ソフィー・イエーツ チェンバロ・リサイタル

俊英イエーツがお届けする“クラヴサン”な一夜

昨年(2007年)7月14日に行われた「西山まりえ チェンバロ・リサイタル」の記憶は、皆様新しいところだと思えます。チェンバロという楽器からあれほど劇的で、踊りと歌に満ちた音楽を引き出すとは…と、アンケートには数多くの賞賛と興奮のお言葉が集まりました。西山まりえの雄弁な演奏によって生命を与えられたのは、イタリア、スペイン、そしてJ.S.バッハの音楽。イタリアやスペインの音楽の持っているパッションあふれる歌、そしてそれに影響を受けたバッハの、〈半音階的幻想曲とフーガ〉。17～18世紀のチェンバロ音楽の情熱的で輝かしい一面を、存分にお楽しみいただけたことと拝察します。

しかしチェンバロには、また別の面もあります。瀟洒で典雅な、いにしへの王侯貴族たちの語らいを想像させてくれる楽器としての一面。仮にそれを「クラヴサン”な一面”」とも呼んでみましょうか。ソフィー・イエーツのチェンバロ・リサイタルは、皆様を「クラヴサン」時間へとお誘いする一夜です。

“クラヴサン”音楽の魅力

「クラヴサン」は、チェンバロのフランス語名です(ちなみに英語名はハーブシコード)。今回のリサイタルの核となるのは、18世紀のフランスの「クラヴサン」音楽。それは、イタリアやスペインと異なり、感情のほとばしりを抑え、洗練された物腰、高雅な気どり(プレシオジテ)を通じ、暗喩やイメージを駆使して聴き手の想像力に訴えかける音楽だと言えますか。

とはいえ、こうしたフランスの「クラヴサン」音楽を、すべて同じ性格でまとめてしまうことはもちろんできません。まず、時代によって、フランスのクラヴサン音楽はかなり性格を異にします。大雑把に区切るなら17世紀と18世紀、より具体的に言うならルイ14世の治世(1715年まで)とそれ以降のルイ15世、16世の時代では、音楽の趣味はだいぶ違います。

太陽王と呼ばれ、ヴェルサイユの豪華な宮廷を舞台に日夜音楽や舞踊の饗宴をくり広げていたルイ14世。強大な王の権威を象徴するかのように、音楽は荘厳で重々しい表情をしています。リュリのオペラはその代表格ですが、この時代のクラヴサンの巨匠たち——シャンボンニエール、ダングルベール、ルイ・クーブラン(後述するフランソワ・クーブランの伯父)——の音楽も、ずっしりとした風格を備えています。その多

くはアルマンド、クーラント、サラバンド、ジグといった舞曲を連ねた組曲として書かれています。(この時代のクラヴサン音楽は、1996年3月に水戸芸術館で行われた「グスタフ・レオンハルト チェンバロ・リサイタル」で紹介され、巨匠の重厚な解釈が深い感動を呼びました)

しかし、ルイ15世の時代に入ると、より繊細な色彩感に富み、機知や洗練に傾いた、いわゆる「ロココ」趣味が支配的となります。ラモーやデュフリ、フランソワ・クーブランの甥であるアルマン＝ルイ・クーブランのクラヴサン音楽は、その代表格でしょう。そしてフランソワ・クーブランは、2つの時代にまたがる巨匠だと言えます。この時代になると、組曲を構成する各曲は、単なる舞曲ではなく、小粋で暗示的な標題を持ちたり、宮廷の人物たちを描写したポルトレ(肖像)であったり、誠に多彩な様相を呈します。20世紀初頭のドビュッシーは〈ラモー讃〉、ラヴェルは〈クーブランの墓〉といったピアノ曲でこれら先達に敬意を表していますが、まさに18世紀のクラヴサン音楽は、印象派のフランス音楽を遠く予言する音楽だと言えましょう。余談になりますがラヴェルの〈クーブランの墓〉は、舞曲を連ねた組曲の形態をとりつつ、各曲が第一次大戦の戦没者に捧げられ隠れた「ポルトレ」の性格も有し、また「墓(トンボー)」という17～18世紀のフランスによく書かれた死者追悼の音楽の姿も借りている、という巧緻な作品です。

周到に計算されたプログラム

ソフィー・イエーツのプログラムは、12年前のレオンハルトのリサイタルの続編と言える内容です。まず、1705年に唯一のクラヴサン曲集を発表しただけであるとは正体が謎に包まれているガスパール・ル・ルー(生没年不詳)の〈組曲 第4番 長調〉。アルマンド、クーラント、ジグの3曲からなる組曲ですが、クーラントには「ヴェネツィア人」という標題が冠せられ、17世紀の舞踊組曲と18世紀の“ポルトレ”組曲との間をつなぐミッシング・リンクとなっています。そして、“大クーブラン”と呼ばれるフランソワ・クーブラン(1668～1733)。生涯に全4巻のクラヴサン曲集(および〈クラヴサン奏法〉)を発表し、その中には27もの組曲(彼の言い方をすれば「オールドゥル」)が含まれる彼の膨大なクラヴサン曲は、まさにフランス・クラヴサン楽派における金字塔です。今回イエーツが選んだの

は、1722年に発表された〈クラヴサン曲集 第3巻〉に収録された〈第14オールドゥル〉。チラシをご覧になられた方はお気づきと思いますが、各曲のタイトルの大部分が「鳥」にちなむものとなっています。中でも“恋の夜うぐいす”は、その甘美な旋律によってクーブランのクラヴサン曲の中でもっとも有名なもののひとつでしょう。また後半には“シテール島の鐘”という曲も登場しますが、これは否応なくヴァーの名画『シテール島への船出』を連想させてやみません。続いて、クーブラン以降の最大の存在ジャン・フィリップ・ラモー(1683～1764)が1728年に発表した〈クラヴサン曲集〉から〈エンハーモニック(異名同音)〉と〈エジプトの女〉。大胆な和声に満ちた前者は和声の大家ラモーならではの作品ですし、繊細な魅力にあふれた後者はまさにロココの音楽。ラモーからはもう1曲、1747年の〈王太子妃〉(ラモー最後のクラヴサン曲)が演奏されます。

この後の世代のクラヴサン曲を取り上げるという手もありましたが、イエーツはフランスの音楽に影響された(または影響を与えた)ドイツの「チェンバロ」音楽を組み合わせ、地勢的な広がりやプログラムを与えました。17世紀中葉に活躍し、ルイ・クーブランらとも交流があったヤコブ・フローベルガーの〈トッカータ 第2番〉を冒頭に排し、最後をJ.S.バッハ(1685～1750)の〈イギリス組曲 第6番 二短調 BWV811〉(「イギリス」という題は内容とは無関係で、むしろフランスの組曲の影響が強い比較的初期の作品)で締めくくるといふ配慮も周到です。

イエーツの紹介スペースが少なくなっしまいました！ ヴァイオリンのレイチェル・ボッジャーやアンドリュウ・マンゼ、鍵盤楽器のリチャード・エガーらと共に英国古楽新世代の新しい風を運んでくれる彼女は、特にフランスのクラヴサン音楽に新鮮きまりない解釈を聴かせます。チラシに一部を引用した吉田秀和水戸芸術館館長のエッセイ(『吉田秀和全集23 音楽の時間V』(白水社刊)などによって日本でもプレイクしつつありますが、今回の来日でソロ・リサイタルが行われるのは水戸芸術館のみ。この機会をぜひお見逃しなく、彼女が導く「クラヴサン」な世界へ(タスカンの歴史的名器を基にした復元楽器を使用します)ぜひお越しください！ イエーツ情報については今後担当者のブログ <http://www.arttowermito.or.jp/blog/yazawa> でも順次ご紹介してまいります。 《矢澤》



鈴木範之
ピアノ



片岡沙織
ピアノ



川口慈子
ピアノ



川又明日香
ヴァイオリン



小林 幹
尺八



根本由奈
ピアノ



横山有紀子
ピアノ



佐藤洋介
ピアノ

ピアノ、ヴァイオリン、尺八の若き才能が出演します！

● 10/4(土) 茨城の名手・名歌手たち 第19回 司会: 畑中良輔

今年4月27日に行われた「茨城の名手・名歌手たち 第19回」出演者オーディション(応募総数 51)で、見事に厳しい審査を通過した8名の音楽家たちが、合格者による本演奏会に登場します。茨城の期待を背負って立つ彼ら、若い演奏家たちは、どのような演奏を聴かせてくれるのでしょうか。

トップバッターで登場するのはピアノの鈴木範之さん。審査委員のアドヴァイスがあり、オーディションで弾いたショパン(バラード第3番)に加えて、よりスケールの大きい(バラード第1番)も聴かせてくれることになりました。心のこもったショパンに期待しましょう。

2番目は、ピアノの片岡沙織さん。オーディションではリスト(スペイン狂詩曲)を弾きましたが、演奏会ではリスト(超絶技巧練習曲)から第10番とプロコフィエフ(ソナタ第6番)から第1楽章を聴かせてくれます。華麗なテクニクと迫力のある表現が聴きどころです。

3番目は、ピアノの川口慈子さん。北爪道夫(様々な距離 II)、三善晃(アン・ヴェール)という現代曲2

曲を披露します(〈アン・ヴェール〉はオーディション演奏曲)。聴く人の感性を刺激する鮮烈な演奏が期待できそうです。

4番目は、「名手」に3回目の登場となるヴァイオリンの川又明日香さん。オーディションでのイザイ(無伴奏ソナタ第6番)の演奏は圧倒的でした。演奏会では、雰囲気をはかりと変えて、ドビュッシーの(ヴァイオリン・ソナタ)が演奏されます。

休憩をはさんで5番目に登場するのは、尺八の小林幹さん。オーディションでは、何とチック・コリアの(スペイン)を雰囲気たっぷりに演奏し、会場を驚かせました。演奏会では自作の(Headland)とともに(スペイン)を再演。尺八演奏の可能性を広げてくれます。

6番目は、ピアノの根本由奈さん。審査委員からのアドヴァイスを受け、オーディションで弾いたシューマン(ノヴェレッテ)第8番の前に同第7番を加えて弾いてくれます。ノヴェレッテは「短編小説」の意味。根本さんの演奏の背後には、どのような物語が広がる

のでしょうか。

7番目は、ピアノの横山有紀子さん。オーディションではラフマニノフ(ソナタ第2番)から第1楽章が演奏されましたが、審査委員のアドヴァイスを受け、同じ作曲家の(幻想小品集)から第2曲、(10の前奏曲)から第5番～第7番が演奏されます。自らも名ピアニストだったラフマニノフの曲で、ピアノ音楽を聴く醍醐味を満喫させてくれそうです。

演奏会のトリを務めるのは、ピアノの佐藤洋介さん。オーディションで演奏されたドビュッシー(前奏曲集 第2巻)から「妖精たちはあでやかな舞姫」「花火」に、同(第1巻)から「アナカプリの丘」「亜麻色の髪の乙女」、同(第2巻)から「交代する3度」を加え、合計5曲が取り上げられます。ドビュッシーの音楽ならではの豊かな色彩がホールを満たすことでしょう。

オーディション審査委員長の畑中良輔氏の司会のもと、茨城の若き才能8名が登場する演奏会。どうかあたたかい拍手で彼らを迎えてください。《関根》

SELF

茨城の東京芸術大学音楽学部卒業生による、盛りだくさんのガラ・コンサート

■ 10/13(月・祝) 第34回東京芸術大学 同声会茨城支部演奏会

水戸芸術館に初登場の東京芸術大学音楽学部同声会茨城支部。まずは会の概略を説明致します。

「同声会」とは、東京芸術大学音楽学部卒業生の会で、各県に支部があります。「同声会茨城支部」は、現在、約100名の会員を擁し、大きな事業として年に一度の演奏会を昭和50年度から開催し、今回で34回目となります。また、5年に一度、つくばと水戸両会場で、それぞれ別途のプログラムによる演奏会を開催しております。その他の事業としては、冊子『同声会茨城支部の歩み』の刊行があります。ま

た、会員の専攻分野が多岐にわたる利点を活用し、学校内での鑑賞会や指導に協力させていただきたく、教育委員会等に申し入れをし、実行しております。

「同声会茨城支部」演奏会の特徴は、東京芸術大学音楽学部が作曲、器楽、声楽科などと並んで邦楽科を持つ学部ですので、邦楽と洋楽による演奏会としております。ただし、昨年は、初めての試みとして、邦楽のみの演奏会を開催致しました。

演奏会は、演奏会実行委員会(現、横田孝志委員長)が企画・運営し、会合を持つと共に、常時、ネット上の会議室も設けて意見交換をし、万全を図っております。

次に、今回の演奏会のプログラム構成について。当支部は、前述のように約100名の会員組織ですので、演奏形態は、アンサンブル中心とならざるを得ません。

今回の演奏会の構成は、ピアノを用いない演奏種目を前半に、ピアノを含む種目を後半としました。前半の最初は邦楽。沢井忠夫(上弦の曲)は、箏・吉永真奈さんと尺八・長須与佳さんの息の合ったアン

サンブル。お二人は、邦楽ユニット「Rin」を結成し、舞台や放送で活躍中。2番目は、「同声会茨城支部」ではじめてのハーピスト、安田朋子さんとチェロ・山本彩子さんの二重奏。L.デュポール(フランスの高名なチェリスト兼作曲家。彼の使用したストラディヴァーリのチェロは、後口ストロボーヴィチの所有となる)のソナタは、それこそ息の合った姉妹の演奏です。3番目は、ヴァイオリン・野末あけみさん、住田真理子さん、ヴィオラ・山田圭子さん、それにチェロ・城戸春子さんによるメンデルスゾーン(メンデルスゾーン)の弦楽四重奏曲。4人の皆さんは、それぞれにリサイタルやアンサンブル等で活躍中。

後半のステージは、バリトン・安蔵博さんとピアノ・中村真由美さんによるドビュッシーの歌曲集(フランソワ・ヴィヨンの3つのバラード)。パリで9年間修行した安蔵さんと、過去に幾度も共演した中村さんのアンサンブルは、皆様にフランスの香りを届けてくれることでしょう。次に、ドイツの同年生まれの大家、J.S.バッハとヘンデルの重唱曲。ソプラノ・青木美穂さん、濱田千枝子さん、バリトン・鈴木 優さん、ピアノ・上仲典

PORTRAIT



写真左: 第33回東京芸術大学同声会茨城支部
演奏会(2007年 会場:水戸市民会館)より
写真右: 豊田あい子

子さんは、つくば地区です。ノバホールをはじめ、県南地区で活躍中。「同声会茨城支部」演奏会では、今まで取り上げられなかったバロックの作品群。心に沁みるステージが期待されます。最後に、米元

りさんのピアノ独奏。東京とつくばで活躍する米元さんは、ベートーヴェン後期の名作〈ソナタ 第31番 作品110〉の真髄に迫ります。

10月13日開催、水戸芸術館初登場の「第34回

東京芸術大学同声会茨城支部演奏会」を、是非お聴き下さいませようお願い申し上げます。

東京芸術大学音楽学部同声会茨城支部長
臼井英男

アメリカの近・現代ピアノ作品群を駆け抜ける。

■ 10/26(日) 豊田あい子 ピアノ・リサイタル

小さい頃から水戸の自然の中で、清い水と動植物に囲まれて、のびやかに田園の世界で育った私にとって、水戸芸術館でのリサイタルは格別の思いがあります。

ニューヨーク(ジュリアード音楽院)の恩師、故ウェブスター氏がパリ時代ブーランジェ、ラヴェル両氏の弟子であったことから、自然と私の興味は特にブーランジェ氏の弟子達—アメリカ人現代作曲家達の作品の足跡にありました。数多くの彼らの作品をニューヨーク初演している私の師から、今は思い出と

なってしまうことが、数えきれない教えを受けました。その後、歳を重ねて2003年に、文化庁より特別派遣ピアニストとして再びニューヨークで、現代音楽ピアニストを多く輩出しているディエス氏の下で学び、ケージ達も多く実験音楽を初演しているウェイラーホールで演奏できたことは、大きな喜びでした。

今回のプログラムは、アメリカ音楽のロマン派から現代へ、ピアノの音を作曲家がいかに、時代と共に変化させていったか、その音の戯れをぜひお楽しみ頂きたいです。ロマン派時代の作曲家が、ゴットシャルクとマクダウエルです。ゴットシャルクの〈アンダルシアの想い出〉、マクダウエルの〈悲劇的ソナタ〉(4楽章形式)。リストとも交流のあった両作曲家の独特のエキゾチックな、広大なロマンの世界をお楽しみください。ジャズを取り入れたアメリカ現代音楽の先駆者で、ラヴェルも憧れたガーシュウィン作品からは、3曲の〈ピアノのための前奏曲〉を演奏します。現代音楽の世界をピアノという楽器を工夫し、従来の音に無い新しい世界を確立したケージの師であるカウエル

の肘を使った曲(リール・ダンス)では、不思議な音の響きをご堪能ください。現代作曲家の中でクールに伝統的作風を固持し、その中でアメリカ民族音楽を絶妙に取り入れたバーバーの〈小さな旅〉は、蒸気機関車のポッポーという音が聞こえる、のんびりした田園風景とジャズリズムの面白い組み合わせの作品です。映画音楽で、有名になったウェストサイド物語の作曲家であり、ニューヨーク・フィルハーモニックの常任指揮者であったバーンスタインの〈5つの誕生日〉では、絶妙なリズムが表現されています。パリのブーランジェ氏の最高の弟子の一人であったコブラント作品からは〈ピアノ・ブルース〉。ケージのピアノを打楽器として扱った〈ペララスナイト(危険な夜)〉。最後のダヴィドフスキー〈ピアノと電子音のためのシンクロニズム〉は、楽しい電子音とピアノの会話です。この曲で彼は、ピューリッツァー賞を受賞しています。

どうぞぜひ、音の戯れの世界にご来場下さいませ。
豊田あい子

最近の公演から

AUGUST



1



2

ちょっとお昼にクラシックEXTRA①

〈ラ・カンパネラ〉の生まれたころ(8月6日)

毎年恒例の「ちょっとお昼にクラシック」から新たに生まれたシリーズ「ちょっとお昼にクラシックEXTRA」の第1回、「〈ラ・カンパネラ〉の生まれたころ〜エラールの歴史的名器で奏でるロマン派ピアノ名曲」。歴史的ピアノの名手である小倉貴久子さんを迎え、1845年製エラールの名器(修復および調律:江森浩氏)でショパンやリストなど、19世紀前半のパリのサロンで愛奏されたピアノ名曲を楽しんでいただくという内容。演奏会前日にコンサートホールに慎重に運ばれたエラール・ピアノは、木目の模様と鈍い光沢がなんとも美しい楽器。江森氏の入念な調整と調律を経て、小倉さんが奏で始めると、豊潤な19世紀の大気がホールをいっぱい満たす。弾きこむほどにその音色は輝きを増し、演奏会では最高の状態で、補助席も含めて満席の聴衆の方々を魅了した。小倉さんは、情感豊かな演奏を聴かせる一方で、合間にはさまれるお話では「木の音」にたとえたその楽器の特性や、ショパンのピアノ奏法についての興味深いエピソードを語られた。〈子犬のワルツ〉をエラールとヤマハで弾き比べる試みも。迫力の〈メフィスト・ワルツ〉第1番で本編をしめくくった後に、アンコールはしっかりとショパンの〈ノクターン 変ホ長調 作品9の2〉。終演後のサイン会も大盛況。プログラム曲順など詳細情報は担当者ブログ <http://www.artowermi.or.jp/blog/yazawa> の「ちょっとお昼EX 小倉貴久子」をご覧ください。

《矢澤》

アンケートから●エラールの音色はとても心地良く、小倉さんの演奏もしなやかで美しかったです。毎日の育児から解放され気持ち良かったです(無記名の方) ●音色がとてもやわらかくて、英雄ポロネーズのエレガントさは今までで初めのステキな演奏でした(水戸市: M.K.さん) ●企画がとても良かったと思います。小倉さんのお話もきけて楽しかったです(無記名の方) ●素晴らしい企画です。ときにタイムスリップしたような気分になりました(水戸市: Y.H.さん) ●あのようにしなやかな軽やかな英雄ポロネーズ、ラ・カンパネラは初めてです。(中略) ノクターンも違うバージョンで聞けて良かった(Y.F.さん)

information

■チケットに関するお問い合わせ

…水戸芸術館チケット予約センター/029-231-8000

営業時間 9:30～18:00(月曜休館)

■公演内容や企画に関するお問い合わせ

…水戸芸術館音楽部門/029-227-8118

■【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

■茨城放送「タッチ・ミー・イン・ザ・モーニング」内「タッチ・ザ・クラシック」

毎週水曜日・朝6:50頃から約10分間

水戸周辺 1197KHz、土浦周辺 1458KHz

水戸室内管弦楽団 子どものための音楽会〈一般公開〉

水戸室内管弦楽団定期演奏会にあわせ、市内小学5年生を対象に毎年開催している、子どものための音楽会。今年は国民文化祭のプログラムの一つとして一般の方にも公開します。

◎日時:11/7(金)10:45～11:45(開場10:00)

◎会場:茨城県武道館

◎入場無料(事前申込が必要です/先着300名様)

◎申込方法:詳細は芸術館ホームページをご覧ください、お電話にてお問合せ下さい。

◎お問合せ:水戸芸術館事務局 TEL:029-227-8111

チケット・インフォメーション

〈9月20日(土)発売分〉

◎宇野陽子 チェロ・リサイタル

11/30(日)15:00開演 料金(全席自由):[前売]一般¥2,000 学生¥1,500

[当日]一般¥2,500 学生¥2,000

◎中村佳代 ピアノ・リサイタル

12/7(日)15:00開演

料金(全席自由):一般¥3,000 学生(大学生以下)¥1,500

◎クリスマス・プレゼント・コンサート2008

12/23(火・祝)17:00開演 料金(全席指定):A席¥3,000 B席¥2,000

これからの演奏会・残席情報

○…残席あり(20席以上) △…残席わずか(20席未満) ×…残席なし

中央…中央ブロック 左右…裏…左右ブロックおよびステージ裏 補助…補助席

◎茨城の名手・名歌手たち 第19回………10/4(土) 自由席○

◎ハーゲン弦楽四重奏団………10/5(日) 中央×、左右・裏○

◎東京芸術大学同声会茨城支部演奏会………10/13(月・祝) 自由席○

◎ソフィー・イエーツ チェンバロ・リサイタル………10/18(土) 中央△、左右・裏○

◎豊田あい子 ピアノ・リサイタル………10/26(日) 自由席○

◎水戸室内管弦楽団第74回定期演奏会………11/8(土)、11/9(日)

8/30(土)よりチケット一般発売開始。

水戸芸術館チケット予約センター(TEL 029-231-8000)にお問い合わせください。

※8/24(日)現在の状況です。

※公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問合せ下さい。

※固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な10月のスケジュール

コンサートホール ATM

■茨城の名手・名歌手たち 第19回

10/4(土)18:00開演 料金(全席自由):¥1,500

■ハーゲン弦楽四重奏団演奏会

10/5(日)14:00開演 料金(全席指定):¥5,000

■高校生音楽講座2008[第2期] 第4回「楽器が違うと、音楽も違う?」

10/10(金)17:00～19:00 参加費:¥200

■第34回東京芸術大学同声会茨城支部演奏会

10/13(月・祝)14:00開演

料金(全席自由):一般¥2,500 学生(大学生以下)¥1,500

■ソフィー・イエーツ チェンバロ・リサイタル ～クラヴサン、あるいはチェンバロ～

10/18(土)18:30開演 料金(全席指定):¥3,000

■芸術文化活性化事業 國井美香 ソプラノ・リサイタル

～バロック音楽とベルカントの魅力～

10/22(水)19:00開演

料金(全席指定):一般¥2,000 学生(大学生以下)¥1,000

■水戸市立第二中学校 第60回清流祭合唱コンクール

10/23(木)12:30開演 入場無料

■豊田あい子 ピアノ・リサイタル

10/26(日)14:00開演 料金(全席自由):¥3,000

■高校生音楽講座2008[第2期] 第5回 「対決? ヴィヴァルディ vs J.S.バッハ」

10/31(金)17:00～19:00 参加費:¥200

エントランスホール

■パイプオルガン ブロムナード・コンサート

10月:19日(日)、25日(土) 開演時間:12:00/13:30(2回公演)

入場無料 ※演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

■白石加代子の源氏物語 【宇治十帖】

10/5(日)18:00開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥2,500

現代美術センター

■ジュリアン・オピー

7/19(土)～10/5(日) 9:30～18:00(入場は17:30まで)

■日常の喜び

10/25(土)～2009年1/18(日) 9:30～18:00(入場は17:30まで)

休館日:月曜日

料金:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600

中学生以下・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と付き添い1名は無料

茨城の主な10月の演奏会 ※有料公演のみ

◆常陽藝文センター TEL/029(231)6611

■上野学園大学・同短期大学部恵声会茨城支部第7回定期演奏会

10/26(日)14:00開演 (問)黒羽TEL/029(226)3384

◆茨城県民文化センター TEL/029(241)1166

■ロシア国立アカデミー民族舞踊アンサンブル「アラン」

10/6(月)18:00開演

◆ひたちなか市文化会館 TEL/029(275)1122

■合唱団ひまわり第11回定期演奏会

10/5(日)14:00開演 (問)合唱団ひまわり TEL/029(276)1399

■ネクサス・プラス・バンド14th concert!

10/12(日)14:00開演

◆常陸大宮市文化センター・ロゼホール TEL/0295(53)7200

■秋川雅史コンサート ～一期一会～ 10/29(水)18:30開演

◆ギター文化館 TEL/0299(46)2457

■宮下祥子ギターリサイタル 10/18(土)15:00開演

◆ノバホール TEL/029(852)5881

■田中潤一(9キー・フルート) & 岩村かおる(フォルテピアノ)

デュオ・コンサート2008 "Mozart & Schubert" 10/8(水)19:00開演

■筑波大学管弦楽団 第64回定期演奏会 10/10(金)19:00開演

■ベルリンフィル木管五重奏団演奏会 10/11(土)15:00開演

■筑波研究学園都市吹奏楽団 第22回定期演奏会 10/13(月)14:00開演

■第24回つくば国際音楽祭 モザイク・カルテット 10/29(水)19:00開演

■第24回つくば国際音楽祭 クレメンス・ホラーク & ウィーン・フィル弦楽三重奏団

10/30(木)19:00開演

■第24回つくば国際音楽祭

ペーター・ヴェヒター & ラルス・ミヒャエル・ストランスキー & 岡田博美

10/31(金)19:00開演

◆鹿嶋勤労文化会館 TEL/0299(83)5911

■ポーランドの歌姫 マリア 10/31(金)18:30開演

※お詫び:9月号の当欄で、日立シビックセンターの電話番号に誤りがありました。正しくは、TEL/0294(24)7711(代)です。関係者の皆様にご迷惑おかけしましたことをお詫びいたします。

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] 2008年10月発行 第136号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]

編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):佐川真美 関根哲也 中崎美智代 中村 晃

矢澤孝樹(編集長)

DTP/村田征司

印刷所/株式会社あけぼの印刷社

次号は…

シュトゥッツマン インタビュー掲載予定!